

日本語失文法の語順選好に関する一考察

井原浩子

005

地域産業活性化のためのデザイン開発の実践

—デザインによる地域産業プロデュースの展開と可能性

玉田俊郎

013

都市風景論

その(1) オールスドルフ公園墓地に表象された近代都市景観のイデオロギー

長谷川 章

021

16世紀ヴェネツィア共和国の都市と建築

—アンドレア・パラディオと同時代の建築家たちをめぐって

渡辺真弓

065

日本語方言アクセントの多様性：新潟市方言の外国地名
と外来語のアクセントをめぐって

大塚恵子

139

井原浩子

Hiroko IHARA

日本語失文法の語順選好に関する一考察

On word order preferences in Japanese sentences produced by agrammatic aphasics

「花子が太郎をpushした」、「太郎を花子がpushした」のいずれも文法的に可能であることから分かるように、日本語では述語が原則的に文の最後に置かれるという制約以外は語順に関して自由な言語であるとされてきた。統語理論では「太郎を花子がpushした」のような語順の文は「花子が太郎をpushした」のような文が持つ基底構造から、かき混ぜと呼ばれる統語操作を経て随意的に作り出されると考えられている。しかし、かき混ぜを受けた文と受けない文で統語的な容認度に差はないことが、どのような語順でも同じように自然で、実際の使用頻度が同じであることを意味するわけではない。実際、読み時間や容認性判断時間の計測に基づく最近の研究 (Mazuka et al. 2002, Tamaoka et al. 2005他) では、かき混ぜ操作を受けた文の方が基本語順の文に比べて負荷が高いことが報告されている。さらに、「NPガ」、「NPヲ」、「NPニ」という3つの名詞句を伴う「物理的移動動詞」(「置く」、「投げる」等)と「所有移動動詞」(「あげる」、「支給する」等)では語順選好が異なるという実験結果が報告されており (中本ら 2006)、実際の言語使用における日本語の語順は従来考えられていたほど自由ではない可能性が指摘されている。以上の先行研究をふまえ、本稿では「NPガ」、「NPヲ」、「NPニ」という3つの名詞句を伴う物理的移動動詞と所有移動動詞に関して、失文法者の語順選考は成人健常者や幼児と異なることを示し、その原因となる可能性のある要因を検討する。成人健常者の場合、物理的移動動詞は「ガ…ヲ…ニ」語順が、所有移動動詞は「ガ…ニ…ヲ」語順が好まれ (中本ら 2006)、同様の語順選好が幼児にも見られる (田村ら 2007)。一方、失文法者を対象とした実験では、どちらの種類の動詞でも「ガ…ニ…ヲ」語順が好んで産出された。この結果の説明としてはKishimoto (2001) の仮説が1つの有力な候補として挙げられる。彼の仮説に従えば、成人健常者では物理的移動動詞の「ニ」格名詞は与格名詞として具現化し、所有移動動詞では間接目的語として具現化する。前者の方が統語構造上後者よりも低い位置にあるため、前者の基本語順は「ガ…ヲ…ニ」、後者は「ガ…ニ…ヲ」となる。成人健常者と同じ傾向を示す幼児を対象とした実験結果も同様に説明することができよう。一方、失文法者については主に2つの可能性が考えられる。1つは物理的移動動詞が所有移動動詞と同じ統語構造であるため、物理的移動動詞でも「ガ…

ニ…ヲ」語順になるという可能性であり、もう1つは両者の統語構造は健常者と同じであるが、その構造から語順にする段階に問題があるという可能性である。しかし、前者は失文法を統語構造の観点から説明しようとする他の仮説との一貫性を欠くため、後者の可能性が高いと考えられる。

玉田俊郎

Toshiro TAMADA

地域産業活性化のためのデザイン開発の実践

—デザインによる地域産業プロデュースの展開と可能性

1. はじめに

日本の伝統的地域産業の中で打刃物産業は特に古く歴史的に見ると飛鳥時代の現在の鳥根県のたたら製鉄に遡ることができる。「たたら」とは足踏みによる送風の装置を指す言葉であるが、日本における製鉄技術を象徴する言葉でもある。

鳥根における古代製鉄技術の確立に伴って、鉄の供給と交易は日本国中に及んだ。鉄は古代から近世の社会において重要な役割を果たした。そのひとつが刀剣にみる武器や武具の生産であった。各地の城下町には「鍛冶町」と称するような職人街が形成され、刀剣などの他にも鋤や鎌、鍬などの農具や包丁などの生活用具も生産された。

刀匠や鍛冶職人も刀や農具などの需要や支配者側の要請によって、日本の各地に移り住み産地形成を行ってきた。その代表的な産地として、高知県の土佐刃物、富山県の越前打刃物、岐阜県の関刃物、新潟県の三条市、山形県の打刃物がある。

これらの産地は今日まで地域の中核的な伝統的地場産業として存続している。しかしこれらの刃物産業は繊維や製紙と同様に明治以降の近代化の過程で衰退してきた。衰退化の大きな要因はヨーロッパからの溶鉱炉の導入とともに近代的製鉄と鉄製品の量産によって、刃物産業は衰退していく。繊維も紡績設備の近代化と化学繊維の普及によって日本各地の伝統的繊維産業は衰退していく。製紙も同様にパルプによる大規模な製紙工場によって衰退する。

地域産業の衰退のもう一つの要因は、上記に示した産業構造の変化に起因するものとは別に、新製品開発やデザインの導入、流通上の整備に関心を向けてこなかったことも大きな要因である。多くの地域産業は中小企業と小規模事業者からなり、OEM（Original Equipment Manufacturing：相手先ブランド生産）や卸販売を前提とした生産体制であったことも衰退化の要因となっている。

多くの伝統的地域産業が衰退する中で、さまざまな施策による活性化が図られ成果を出している地域産業もある。本報告では伝統的地域産業の中で山形県の打刃物産業に対して筆者がコンセプター¹として新たな製品開発とデザイン開発を行ったので報告する。

2. 山形県の打刃物産業の沿革と課題

刀匠鍛冶の伝統を受け継ぐ山形の打刃物は、今から約650年前、(西暦約1350年頃)に最上氏の始祖である斯波兼頼が羽州管領として出羽国最上郡(山形周辺)に入部した折、召し抱えの鍛冶師たちを連れて来たのがはじまりと言われている。

以来、各城主の厚い保護をうけ、武器や農具などを生産していた。明治以降は、主に鎌や鍬、鋏などの小農具を製造し、現在、山形打刃物工業協同組合の組織のもと、伝統の技と新しい技術を生かして高品質の刃物を生産し、用と美を兼ね備えた打刃物として高い評価を得ている。

また山形鍛冶の特徴は自由鍛造という伝統的な手仕事による製法が現在も行われていることである。職人のきめ細かな仕事が映えるこの自由鍛造は山形の打刃物を特徴づけている。このため、単に打刃物ばかりでなく、さまざまなものへの展開に、その可能性を秘めている。

1. 山形打刃物の課題—岐阜県関市との比較考察

地域産業として山形打刃物の現状を見ると事業者の大幅な減少による産地としての活力の低下である。多くの地域産業がそうであるように、近代化の波にうまく乗れず需要が低下し生産規模の縮小、事業者の減少という循環に入った地域産業は衰退していく。

近代化には製品開発や生産技術的側面の革新とデザイン開発も含めた市場開発やマーケティング、ブランド化というソフト的側面、そして経営や生産組織のマネジメント的側面がある。

打刃物の地域産業として近代化に対応し、今日でも産地形成を果たしている地域としては岐阜県の関市、新潟県の三条市がある。特に岐阜県の関市は歴史的な刀匠を輩出し、関鍛冶は全国に知られている。今日でも刀剣保存会が結成され伝統的刀匠の技術が継承されている。

同時に明治以降の近代化への対応も早く積極的な技術導入と製品開発を進めていった。ナイフや鋏、包丁、農機具などの生産にプレス加工やプラスチック金型、ステンレス素材の導入を行い、「和」の製品から「洋」の製品への転換を進めた。その結果、関は国内有数の刃物産地となった。

当然ながらマーケティングやデザインの導入が進み打刃物から広く金属加工産業への転換が進ん

長谷川 章

AKIRA HASEGAWA

都市風景論

その(1) オールスドルフ公園墓地に表象された近代都市景観のイデオロギー

本論はドイツのハンブルクに1877年誕生したオールスドルフ公園墓地の成立の歴史を詳述することにより、近代都市における都市景観に墓地空間が果たした意味について論考したものである。

本論は大きく5章から構成されている。第1章ではオールスドルフ公園墓地の建設の歴史的経緯を詳述し、その設計に係わった中心的庭園建築家であるW. コルデスとO. リンネについて言及した。第2章から第4章では、ドイツにおける墓地の文化を体系的に論じ、オールスドルフ公園墓地をその体系の中に位置付けた。即ち第2章では西欧の死生観と埋葬文化の歴史を論じた。そこではキリスト教のカトリックとプロテスタントの問題、あるいは土葬と火葬の問題を中心として、恐怖の死の観念が永遠眠りという安らぎの観念へと変容する過程が近代の歴史として解釈された。第3章では墓地の内部空間の変容の歴史を論じた。墓地は教会に付随したものから、独立して脱教会化し、同時に風景式庭園の影響と近代衛生観念から植栽され公園化された。最終的には自然回帰の死生観を反映した森林墓地として、既往の森を墓地化するに至った。第4章では墓地空間が近代都市における公共緑地として果たした役割を論じた。市民公園が登場する18世紀まで、墓地が公共の公園の役割を担っていたことを論じ、戦後は都市計画の公開緑地のネットワークの拠点の一つとしての役割を果たす過程を論じた。

第5章では第1章から第4章で論じた史実の解釈にあてられた。即ち近代都市景観のイデオロギーを、墓地の分析から論じた。第1に都市が非理想的な要素を排除するという近代のイデオロギーを指摘し、その象徴として墓地を位置付けた。都市公園などの自然景観がこうした排除や管理のもとにあることを指摘した。第2に死という現象が宗教的、社会現象から解釈され個人的現象へと還元されていく過程を、市民社会の成熟の過程で近代的な自立した個人が生成されていく過程として解釈した。その結果個人に還元された死を最後に受け入れる場として都市の自然環境が大きな役割を果たしていることを指摘した。第3に墓地の埋葬には空間的ヒエラルキーがあり、それが常に社会階層を反映していた事実を指摘し、社会を映す鏡として墓地空間を位置付けた。特に世紀末からは国家のアイデンティティの確立の中で国土が認識され、独立のために戦った戦没者が森林墓地に埋葬されるなど、森林墓地がナショナリズムを象

徴する場としての意味を担ったことを指摘した。第4に墓地は教会から離れた時点で市民に解放されたが、植栽された墓地は植物園や歴史博物館や彫刻美術館としての役割を果たしていた。更に死生観の変化から、公園墓地での瞑想が社会的な道徳や倫理観を教育する場となっていたことを指摘した。こうした社会教育や道徳教育の場として、自然風景を内在した墓地は近代市民社会を準備するうえで重要な役割を果たしていた。

渡辺真弓

Mayumi WATANABE

16世紀ヴェネツィア共和国の都市と建築

— アンドレア・パラディオと同時代の建築家たちをめぐって

The City and Architecture of the Sixteenth Century Venetian Republic
— Works of Andrea Palladio and His Contemporaries in Venice

As is indicated in the title, this paper talks about the city and architecture of the sixteenth-century Venice, seen through the activities of several architects including Jacopo Sansovino, Michele Sanmicheli, and above all Andrea Palladio, the continuous subject of the author.

Venice was the capital of the Venetian Republic, which ruled the mainland territory called Terra Ferma, including Padua, Vicenza and Verona since the beginning of the fifteenth-century. After the peak of economic prosperity, the marine trade city-state Venice was faced with various problems in the sixteenth century: the war against the League of Cambrai, the economic decline following the geographical change of trade routes, the conflicts with the Ottoman Turkish Empire, the frequency of epidemic diseases, etc.. But conscious of being in crisis, the Republic sought various ways to maintain peace and security, and tried to reinforce not only political, diplomatic and military powers but also cultural attraction of the city of Venice, for which purpose the above mentioned architects made respective contributions.

Jacopo Sansovino (1486-1570) came to Venice after the Sack of Rome in 1527 and was received, in the program of *renovatio urbis* promoted by the Doge Andrea Gritti, as an architect to bring a new trend of architecture *all'antica* to Venice. With the three main buildings designed by Sansovino — the Zecca (Mint), the Library of Saint Mark and the Loggetta — the urban scenery around the Piazza San Marco seen from the sea was so improved that it reminds us of the elegant urban setting of the tragic scene illustrated in the Book II of Sebastiano Serlio (1475?-1554), who had been influential in Venice as an architectural theorist before he moved to France in the early 1540s.

Michele Sanmicheli (1484/87 -1559), after working in the other districts of Italy (Rome, Orvieto, etc.), began to work for the Venetian Republic in the late 1520s as an architect and military engineer. In his hometown Verona, Sanmicheli left a number of palazzos and city gates along with the fortified walls and bastions. In Venice he designed the Fortezza di Sant'Andrea (1535-47) near the Lido. Meanwhile he made

several long trips of inspection to direct the works of fortifications in the port towns along the Dalmatian Coast and the East Mediterranean islands (Corfu, Crete and Cyprus) which were then under the rule of the Venetian Republic.

The Arsenal of Venice, founded in the twelfth century as an official shipyard, began to be enlarged and reinforced consciously after the Fall of Constantinople by the Turks in 1453; in the late sixteenth century the whole complex of the Arsenal was completed as a strong navy yard with various attached facilities including the Cord Factory (Corderie della Tana, 1579-91) by Antonio Da Ponte (15012-97), who was the chief official architect of the Republic called “Proto al Sale” for a long time and is now known mainly with his design of the famous Rialto Bridge (1588-91).

Cristoforo Sabbadino (? – 1560), an engineer of the “Savi ed Esecutori alle Acque” (Venice’s unique office covering water problems), is little known except as the inventor of the “Plan for Venice” of 1557, the significance of which has only been emphasized through recent studies. In this plan Sabbadino made various proposals to maintain the environment of the Laguna, among which was an idea of limiting the expansion of land into the sea, or making a clear outline of the city of Venice against the sea, by introducing continuous seaside walks made of stone called “fondamenta”: a part of the plan was realized after his death, as seen in the long stretching Fondamenta Nuove (1588-90) that forms a northern boundary of the city.

Compared with these architects or engineers who worked for the Republic in the sixteenth-century, what did Andrea Palladio (1508-80) do in Venice? In the mid 1550s when he tried to enter Venice, Palladio was already a well-known architect in Vicenza with a lot of works of palazzos and villas. Among the clients of the villas there were a number of Venetian nobles, but he could not get a chance to build a palazzo in Venice; in *The Four Books of Architecture*, there are two palazzo designs he made for Venice in vain, for which some intriguing hypotheses are presented.

With the support of his patrons, especially Daniele and Marc'Antonio Barbaro brothers,

Palladio was given opportunities to design several religious buildings in Venice. While discussing each of his works in detail, this paper argues some problems presented by scholars and explains some significant viewpoints; in the façade of San Francesco della Vigna (1562), Palladio introduced the theme of the “two superimposed temple fronts” ; for San Giorgio Maggiore (1565) the author approves the authenticity of its façade design (though often questioned) along with the attraction of the interior space. Around Il Redentore (1576-77), the most important commission Palladio received in life, the political situation of Venice can be seen through the process of decision making by the Senate, and the influence of Turkish architecture could be pointed out in some parts of the design. As for the Convento della Carità (1560-61), in addition to the Palladian aspects, it is interesting to trace the historical change of the building until now. Of the smaller churches of Palladio, Santa Lucia (1564-65) was destroyed in the 1860s to give space to the modern railway station, while Le Zitelle (1579-80), one of the charitable institutions in Venice of the day, still exists on the Giudecca island.

Palladio experienced success and failure repeatedly in Venice; he made a great success with the ephemeral architecture to receive Henri III of France in 1574, but after the fire of Palazzo Ducale in 1577 his design to rebuild it thoroughly in classical style was refused in preference for the conservative design of Da Ponte. In 1570 he published in Venice, a great center of publication of the time, *The Four Books of Architecture*; needless to say that it made a long success through following centuries. It is often said that Palladio could leave in Venice nothing but religious architecture, but his influence is distinct in the later churches in Venice, most of which have some such elements as a façade with classical orders made of white Istrian stone, big thermal windows, light interior space, etc..

The identity of Venice was established through centuries, but in the sense of culture the sixteenth-century was the brightest of all, and undoubtedly it was the crucial century for the completion of its

urban form; in such context the architects discussed in this paper were each able to leave remarkable works in Venice.

Contents

Introduction: The Sixteenth Century of Venice
 Social and Economic Changes
 Various Problems

1. Process of Urban Reform
 Two Centers of Venice
 Around the Piazza San Marco
 Main Works of Sansovino
 Serlio's Scenes with Urban Settings
 Surrounding buildings of the Piazza
2. Features of a Marine City-State
 Sanmicheli as a Military Architect
 Development of the Arsenal
 Urban Form Outlined against the Lagoon
3. Relationship between Palladio and Venice
 Acquaintance with Patrons
 Venice and Terra Ferma
 Imaginary Palazzos in Venice
4. Three Main Works of Palladio in Venice
 Prelude to Religious Architecture
 San Francesco della Vigna
 San Giorgio Maggiore
 Il Redentore
5. Other Works of Palladio in Venice
 Convento della Carità
 Santa Lucia and Le Zitelle
 Different Activities
 Publication of books

Conclusion: The Architects in Venice
 Summing-up of the previous chapters
 Palladio's Merit in Venice
 Effects of Published Books
 Venice Proud of Herself

大塚恵子

Keiko OTSUKA

日本語方言アクセントの多様性：新潟市方言の外国地名
と外来語のアクセントをめぐって

Diversity of Accentual Patterns of Japanese Dialects: On the Accentual
Patterns of Foreign Place Names and Loanwords in Niigata Japanese

日本語諸方言は、音韻、文法、語彙など、すべての面において多様である。本稿では、外国地名と外来語を中心とした名詞のアクセントに関して、主として新潟方言と東京方言を検討する。ここで取り上げる新潟方言は、いわゆる特殊モーラのアクセントにおいて、東京方言とは異なる振る舞いをするのを見ていく。東京方言とは異なる特質を見せる新潟方言のアクセント現象を考察することによって、日本語方言の持つ多様性の一端を確認する。新潟市方言話者による外国地名と外来語のアクセントを考察し、それが、大塚（2004）で示した新潟方言タイプおよび本稿で示す新潟村松方言タイプを一方に、東京方言を他方に置いた中間に位置することを見る。新潟方言では、アクセント核を担う要素が東京方言と同じく音節であることを示し、しかし、東京方言とは違ってアクセント核が自動的に音節初頭のモーラにいくのではないのを見る。「特殊モーラ（拍）はアクセント核を担わない。」というよく知られた一般化が当てはまらないように見える言語事実がある。これは、この新潟方言では、アクセント核を担うのは音節であるから、音節のきれめでピッチが下がる、という説明が可能である。シラビーム方言（音節方言）と言われる鹿児島方言で、音節の境界でピッチが変わると同じ現象と言える。東京方言は新潟方言の持たない「特殊モーラはアクセント核を持たない」という制約を持っていることになる。

新潟市方言話者による外国地名と外来語のアクセントは、この制約を受け入れつつある中間的な段階にあることを示す。東京方言との言語接触によるものと考えられる。東京方言に関して、「アクセント核を担う単位は音節である。」とすることによって、アクセント核は自動的に音節初頭のモーラにいくことになるので、「自立モーラ」と「特殊モーラ」の区別が不要になるという考え方があがるが、同じ東京式アクセントに属すとされる東京方言とここで取り上げる新潟方言とを区別し、中間段階を説明するのは、「特殊モーラはアクセント核を持たない」という制約のあるなしである。この制約は何らかの形で必要である。

音節言語とモーラ言語の特性から二つの要素を取り出してその組み合わせを考えると、日本の諸方言のいくつかのタイプが浮かび上がってくる。その中で、東京方言と新潟方言が、音節言語の特性とモーラ言語の特性を併せ持つ中間的なタイプ

であることが見えてくる。そしてここに提示した新潟市方言タイプは、東京方言と、大塚（2004）の新潟方言タイプや新潟村松方言タイプとの言語接触によって生じたと考えられる。また、要素を組み合わせた方言タイプの地理的分布を考察すると、音節言語とモーラ言語の特性を併せ持つ中間的なタイプである東京方言や新潟方言の存在は、それらがより大きな規模の言語接触、端的に考えれば音節言語とモーラ言語の接触の結果である可能性を推測させる。言語接触の可能性を視野に入れて日本語諸方言の多様性を検討、分析することの意義は大きい。

本号の執筆者

井原浩子 (いはら・ひろこ) 東京造形大学教授
玉田俊郎 (たまだ・としろう) 東京造形大学准教授
長谷川 章 (はせがわ・あきら) 東京造形大学教授
渡辺真弓 (わたなべ・まゆみ) 東京造形大学教授
大塚恵子 (おおつか・けいこ) 東京造形大学教授

東京造形大学研究報

9

Journal of
Tokyo Zokei University
No.9
2008

発行 2008年3月31日

編集

東京造形大学研究報編集委員会

編集委員長——長尾 信

編集委員——田窪麻周

鍵谷明子

越村 勲

清水哲朗

玉田俊郎

発行

東京造形大学

192-0992 東京都八王子市宇津貫町1556

Tel. 042-637-8111

Fax 042-637-8110

URL <http://www.zokei.ac.jp>



Tokyo Zokei Daigaku/

Tokyo Zokei University

1556, Utsunuki-machi Hachioji-shi,

Tokyo 192-0992, Japan

Telephone 042-637-8111

Facsimile 042-637-8110

URL <http://www.zokei.ac.jp>

制作・DTP / (株)風人社
印刷・製本 / 造形美術印刷